



## 第3部

# クローズアップ須賀川

古きよき時代を慕う心、

そして吹き抜ける新しい風を感じる心。

二つの心を紡ぎながら誉れ高き

文化を今へと受け継ぐ、須賀川、時の紡ぎ唄。

規模も美しさも世界最大級

「国一指一定一名一勝」

# 須賀川の牡丹園

**須** 賀川を代表する花「牡丹」。百花の王と呼ばれ繁栄のシンボルともいわれる牡丹が、春になると290種、7000株も咲き誇り、訪れる人を魅了するのが、国指定名勝「須賀川の牡丹園」です。

そもそも牡丹園は、約250年前の明和3年(1766)、須賀川で薬種商を営んでいた伊藤祐倫が、薬用として摂津国山本村(現在の兵庫県宝塚市)から、苗木を持ち帰り栽培したのが始まりと言われています。その後受け継いだ柳沼家が種類、株数を増やし、薬用から観賞用へと丹精込めて育てました。昭和7年に国の名勝に指定され、ほぼ現在の形と

なりました。昭和32年(1957)に「財団法人須賀川牡丹園保勝会」(平成25年に「公益財団法人」となる。)が設立され、肥培管理や牡丹園の維持管理に務めています。

昭和60年に建立されたもので、牡丹姫像は中国洛陽市との牡丹を架け橋とする交流のあかしとして、洛陽市王城公園の牡丹仙子像を模しています。平成23年(2011)3月の東日本大震災では、園内施設に大きな被害がありました。春になり例年と変わらぬ見事な花を咲かせた牡丹は、訪れた多くの観光客や被災された人々の心の癒しとなりました。



須賀川の牡丹園は国指定の名勝



園内には約290種、7000株の牡丹が咲き誇る

## 広大な日本庭園に世界最大級の牡丹園 艶やかに咲き誇る牡丹たち

### ●須賀川牡丹園の歴史

- 明和3年(1766) 薬種商伊藤祐倫が薬用として摂津国山本村(現在の兵庫県宝塚市)から牡丹の苗木を持ち帰り栽培を始める  
明治初期、柳沼家が受け継ぎ、薬用目的から観賞用へ
- 大正12年(1923) 牡丹園入口に那須雲照寺の釈戒光(1871~1928)の筆による「牡丹園」の標石を建立
- 昭和7年(1932) 国の名勝に指定される
- 昭和11年(1936) 作家・吉川英治が牡丹園を訪れる  
牡丹園で牡丹の枯れ木を焚く牡丹焚火を目にした吉川英治は、小説「宮本武蔵」の一場面に引用したと言われる
- 昭和14年(1939) 牡丹園に一生を捧げ、俳人としても活躍した柳沼源太郎死去(64歳)
- 昭和32年(1957) 牡丹園の維持管理団体として財団法人須賀川牡丹園保勝会が設立される
- 昭和45年(1970) 昭和天皇、香淳皇后両陛下がご来園
- 昭和53年(1978) 牡丹焚火が俳句歳時記の季語として登録される
- 平成5年(1993) 樹齢約150年の古木3本などが230年ぶりに宝塚市に里帰り
- 平成13年(2001) 牡丹焚火が環境省の「全国かおり風景百選」に選ばれる
- 平成17年(2005) 花伸亭が新築オープン
- 平成22年(2010) 園内で生まれた新品種牡丹に公募により「須賀川の微笑」と名付ける
- 平成23年(2011) 東日本大震災により園内の施設が被害を受ける  
牡丹会館が新築オープン(震災により1か月遅れて5月にオープン)
- 平成24年(2012) 園内で生まれた新品種牡丹に「希望の光」と名付ける



柳沼源太郎 (1875~1939)



大正時代の牡丹園



昭和初期の入口風景



昭和11年、吉川英治が牡丹園を訪問



中国洛陽市との牡丹友好と交流のあかし「牡丹姫像」



### 牡丹焚火

牡丹焚火は、毎年11月第3土曜日に須賀川牡丹園で行われる牡丹の古木を供養する行事です。この焚火を囲んでの句会が昭和53年から開かれ、平成13年には環境省の「全国かおり風景百選」にも認定されています。牡丹焚火の始まりは大正時代に遡ります。当時の園主・柳沼源太郎は牡丹の枯木を供養するため焚火をしていました。源太郎は趣味で俳句を詠んでいたこともあり、当初は親しい俳人を招いて行っていた焚火でしたが、後に多くの俳人や歌人・文人が訪れるようになりました。昭和53年には俳句歳時記の季語として「牡丹焚火」が登録され、牡丹焚火は須賀川の晩秋の風物詩として定着しました。

昭和天皇御製碑



県内最大級を誇る花火が夏の夜空を彩る

# 釈迦堂川花火大会

**有** 名花火師による尺玉の競演をはじめ、合唱と花火のコラボレーションによる音楽創作花火、尺五寸玉、ナイヤガラなど約1万発もの花火が華麗に夜空を彩る「須賀川市釈迦堂川花火大会」。この花火大会は、昭和53年（1978）に始まりまし。

元商工会議所や地域の団体を中心に実行委員会が組織され、平成17年（2005）、須賀川市、長沼町、岩瀬村の3市町村の合併を契機に、地元花火工も大会に加わり、より演出に趣向を凝らした芸術性の高い花火大会へと成長。今では30万人を超える来場者でにぎわう東北有数の花火大会となりました。

は平成14年。平成22年には、個人の思いを伝えるメモリアル花火やFMラジオでの実況生中継が始まり、花火大会を支えるサポーターの募集もこの年に開始されました。

に盛大に開催。市内中学校5校の合唱部員の歌声と花火とがコラボレーションする音楽創作花火はこの年に始まったものです。

平成25年、35回目を迎えた「釈迦堂川花火大会」は、次代を担う子どもたちに夢や希望、感動を与え、元氣な須賀川を全国にアピールする夏の風物詩です。



約1万発の花火が夏の夜を彩る

打ち上げ会場となる市民スポーツ広場

**地産地消の花火**

「須賀川市釈迦堂川花火大会」に欠かすことのできない存在が、明治6年（1873）創業の地元須賀川の老舗・糸井火工です。社長の糸井一郎氏は県の技能者表彰を受賞した名工です。糸井火工が平成17年（2005）から須賀川の花火大会の演出を手掛けるようになると、花火大会もコンピュータを駆使した音楽と花火が融合した芸術性の高いものへと進化を遂げました。その一方で、花火そのものの素晴らしさを須賀川市民に見せたいとの思いから全国各地の名工の花火も厳選して打ち上げています。

釈迦堂川花火大会は、30万人を超える来場者でにぎわう東北有数の花火大会



震災以降始まった花火と音楽のコラボレーション（音楽創作花火）

